

福沢研究センター通信

News letter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第4号 2006年3月31日 発行

目次

*個人的回想～福沢研究センターのこと 小泉 仰 … 2	*主な新収資料…………… 8
*歴史資料保存利用機関としての 福沢研究センター 西沢直子………… 3	*主な動き…………… 10
*講演会・セミナー概要…………… 4	*諸記録…………… 11
	*スタッフ一覧…………… 12



皮製ケース 縦100mm×横120mm×厚65mm

* アメリカで購入した双眼鏡 *

慶応3（1867）年、幕府が購入した軍艦引取りのため渡米した際、アメリカで購入したといわれている。大変贅沢なつくりで、本体は象牙製。福沢諭吉4女志立滝氏の遺品であり、滝氏4女多代氏は「母は生前、父諭吉のアメリカみやげの象牙の遠目鏡といって、大切にしておったものです」と語っている。

参考文献：富田正文「アメリカみやげの遠目鏡」『塾友』284号（昭和56年1月）



個人的回想～福沢研究センターのこと

こ いずみ たかし
小 泉 仰

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

1986年秋のこと、当時福沢研究センター所長の河北展生さんが突然私の研究室に来られ、私に次期の所長になるようにと要請された。私は吃驚して、私の任でないことはもちろんのこと、翌年から一年間の研究休暇を文学部から与えられて私が日本にいないことや、1988年にはケンブリッジ大学ダウニング校へ交換教授として行くことが決まった事情をお話してお断りし、河北さんもほぼ納得されたことを覚えている。

ところが、その翌日に副所長の内山秀夫さんが見えて、河北さんの残任期間を勤めることが文学部出身運営委員の義務であると強調され、後の事務関連の仕事は副所長が全部引き受けるから心配無用であると強硬に主張された。私は、強面には弱い方なので、しぶしぶ内諾をしたことを覚えている。1987年の1月28日付けの私の日記を見ると、当時のセンターを管轄していた松本三郎理事から電話があって、理事室の松本さんにお目に掛かったところ、所長就任を言い渡されたことと記されている。そのお陰で、一年間の研究休暇も取り消され、あまつさえケンブリッジ大学ダウニング校との交換教授による滞在も6ヶ月から3ヶ月に短縮させられてしまい、1987年4月から所長に就任することになり、天を仰いで嘆息したことを覚えている。

幸いなことに、私が引き継いだ残任期間の1年半には、問題は殆どなかった。当時センターで議論になったことを思い出してみると、次の二つがある。一つは、研究所機構としては、事務の専任の方が数人おられたが、当時の研究所員には、各学部ならびに諸学校から集まった兼担所員と他大学から来た客員研究員の研究機関であったから、研究ならびに事業を発展させるのに、もどかしい思いをさせられたことである。こうした問題が所員の間で痛感されたので、センターには是非とも専任研究員が必要であるとの意見がセンター会議でもあって、私は松本三郎理事と掛け合ったことを記憶している。

さらに慶應義塾創立150年を迎えるに当たって、センターとしても慶應義塾150年史を作るべきかどうかといった議論がかなり熱を帯びてきたが、専任研究員のいないセンターでの仕事の能力に限界があり、また時間的問題もあって、150年史は難しいのではないかという消極的見方も生まれ始めたことである。

一方、センターでの楽しみは、各学部ならびに諸学校の研究者や、他大学ならびに他の研究機関の福沢研究者

たちに、セミナーを担当して頂き、そこで研究者の講演を聴講または質疑することができたことである。もちろんセミナーで初めてお会いした方も多くおられたが、私も長年親しくして頂いた方々もおられて、改めて少人数の会合で交ることができたのは、大変な楽しみであった。私の所長任期以外の時でいえば、私が大変親しくさせて頂いている武田清子さんのご主人で、八王子大学セミナーハウスで一緒にしたこともある長幸男さんの講演が記憶に残っている。

また私の任期期間では杉原四郎さんのことを一番よく覚えている。杉原さんには、特に申し訳ないことがあったからである。J. S. ミル研究や明治の経済思想研究の権威であった杉原さんは、長年日本イギリス哲学会長をしておられたが、私もこの会の理事をしていたので、杉原さんとは常に学会の理事会、例会、大会などでお目に掛かり、親しくさせて頂いていた。私は、杉原さんこそイギリス紳士以上の紳士であると尊敬していた。そこで、是非ともセンターで講演をして頂きたいと思い、たまたま東京でイギリス哲学会の会合があったので、その翌日に講演をして頂きたい旨のお願いをしたところ、杉原さんから快諾を頂いたので、セミナー講演を担当して頂いたのである。

ところが、講演の後、私が杉原さんのお体を心配したほど長い白熱した討論があった。三田近辺の料理屋で食事をして頂いた後、お泊まりのホテルに帰られた杉原さんは、その晩、脳梗塞で倒れられ、救急車で市ヶ谷の警察病院に急遽入院された。翌日私もお見舞いに上がったが、半身不随になられ、長い間の闘病生活を余儀なくされ、執筆活動に復帰されたのは大分後になってからである。私は、お見舞いの席上、学会での疲労とセンターでの講演とが重なったせいであると思い、大変申し訳ないことをしたと平謝りに謝った記憶がある。杉原さんはもちろん貴方のせいではありませんよと慰めて下さったが、私は今でもセンターでの講演のせいではないかと申し訳なく思っている。



歴史資料保存利用機関としての 福沢研究センター

にし ざわ なお こ
西 沢 直 子
(福沢研究センター助教授)

福沢研究センターは、近代日本に関する研究機関としていくつもの役割を担っている。そのひとつに「歴史資料保存利用機関」としての役割がある。「歴史資料保存利用機関」という言葉は、一般にはあまり耳慣れない言葉であるが、アーカイヴスといわれるような機関の役割をよく現した言葉であると思う。まさに歴史的なまもろの「資料」を、保管ではなく「保存」し、倉庫に仕舞いこむだけではなく「利用」するための機関なのである。

日本においてアーカイヴスの分野は、欧米はもちろんアジア各国に比べても立遅れている。特に企業や学校では、アーカイヴスは長年倉庫に過ぎず、経営サイドから求められていたスタッフは誠実な倉庫番であったように思う。もちろんどの現場においても、そこで働いているスタッフは、業務の専門性を強く認識せざるを得ず、熱心に勉強会や他機関との交流会などを行ってきた。その結果最近ようやく少しずつではあるが、充実がはかられ始めた。福沢研究センターも保存資料の重要性や量に比べて、設備面でもスタッフ数でも決して十分とはいえないが、平成14年に卒業生の寄付により調温調湿機能のある収蔵庫（24.2㎡）が完成し、平成17年度からは専任教員（1名）も認められた。

歴史資料保存利用機関としての福沢研究センターは、大きな2つの柱を持っている。福沢論吉関係資料と慶應義塾関係資料である。前者は長男一太郎のご子孫から昭和26年に管理委託を受け、昭和58年に寄贈された遺品・遺墨・原稿・書簡・写真類が基幹となっている。そこに、昭和20年代から40年代にかけて編纂がなされた『福沢論吉全集』（昭和33～39年、44～46年再版。岩波書店）編集部から引継いだ書簡・文書類、一太郎以外の8人の子女の家系や中上川彦次郎・鎌田栄吉といった福沢との交流が深かった塾員の家系、福沢の友人の家系のご子孫などから寄贈を受けた資料が加わっている。福沢関係資料の8割以上は関係者からの寄贈資料になる。近年になって、福沢歿後100年記念事業として『福沢論吉書簡集』（平成13～15年、岩波書店）を編纂した際に、書簡を積極的に収集し、それ以降徐々に購入資料も増加している。

一方慶應義塾関係資料は、『慶應義塾百年史』（昭和33～44年、慶應義塾）編纂時に収集された資料が中心になっている。明治期の学則である『社中之約束』や成績表である『学業勤惰表』『大試業席順』をはじめ、儀式

関係の書類や各部署が作成した日誌類、時間割などの教務関係書類、加えて明治期の給与表など人事関係書類がある。ただ慶應義塾全体としての組織的な収集はこれまであまり行われておらず、現在のところ年度や部署による精粗の差が著しい。またこうした慶應義塾に直接関わる資料とは別に、義塾で学んだのち各界で活躍した人物の在学中の日記や講義を受けたノート類、卒業証書、学内の機関紙などに書いた原稿なども所蔵している。学生の集合写真や卒業写真、寄宿舎やクラブでの活動の様子を撮った写真などの写真資料もあり、複写物で保存しているものも含めれば12,000点を超える。これらの資料の搬入経緯は、主に寄贈と他部署からの移管であるが、時折報国隊の腕章などが市場に出ることもあり、購入資料も皆無ではない。

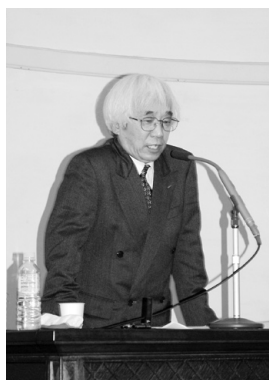
上記のように福沢研究センターは、歴史資料保存利用機関として十分な資料を有している。未整理のものも多く所蔵点数をはっきりさせることはむずかしいが、1994年度から2004年度までの間に整理された非図書資料は、受入の際付与するID番号から算出すると6,055点になる。しかし機関としての充実を考えると、単に点数だけではなく前述の精粗の差をなくす努力も必要であろう。近年、義塾で要職を務めた方のご遺族から、1度にダンボール箱（430mm×320mm×320mm）30箱、60箱というまとまった単位で資料の寄贈を受けることが多くなった。平成3年の「慶應義塾文書保存規程」制定以前には古い文書の保存状況は必ずしも十分とはいえないことを考えると、塾長などの要職を務めた人物の個人情報の中に、他には残っていない貴重な資料が含まれている可能性も高い。しかし福沢研究センターの現状では、スペースの面でも人員の面でも、大量な資料を恒常的に整理していくことは不可能であり、今後の改善が求められる。

また「利用機関」としての充実も大きな課題である。現在福沢研究センターには閲覧のためのスペースがなく、十分に対応することができない。幸いなことに主な収蔵資料は、平成元年から10年にかけて行われたマイクロフィルム化によって雄松堂出版の『福沢関係文書』に収められ、マイクロフィルムでの閲覧が可能である。資料保存上の良策でもあることから、図書館においてマイクロフィルムでの閲覧をお願いしているが、新しい収蔵資料は当然収録されてはならず、今後は閲覧体制の充実も必要とされよう。

福沢諭吉の地方自治論

— その三つの源泉 —

いし かわ ひ さ お
石 川 一三夫
(中京大学法学部教授)



講演中の石川一三夫氏

福沢諭吉の地方自治論には三つの源泉がある。第一に西欧自治都市の思想、第二にアメリカ民主主義の思想、第三に日本的自治の思想である。

(1)福沢はまず西欧自治都市から多くのことを学んだ。彼がいかに西欧自治都市の精神を重視していたかは、『西洋事情』(慶応4年)においてすでに明らかである。福沢は、

西欧においては市民に支えられた自治都市(分権)が存在したことによって、国家の構造が多面的になり、「フリーダム」(freedom)や「リベルチ」(liberty)といった観念が重視されるようになったと洞察している。福沢の自治都市にたいする理解は正確で、今日の私たちが普通に有している知識とそう大差がなかったという点が、驚きである。

(2)福沢は、トクヴィル『アメリカの民主主義』を通じて、アメリカデモクラシーからも多くのことを学んだ。政治的には集権主義でなければならないが、行政的にはタウンシップ(素人行政)を基礎にした分権主義でなければならないとする理論が、福沢『分権論』(明治10年)に与えた影響は決定的であった。自治権の分布なくしては、「政府ありてネーションなし」という日本の現状を打破することはできない、と福沢は断じている。

(3)福沢は日本的自治からも学ぶところが多かった。このことは『国会の前途』(明治23年)において明らかである。福沢は江戸時代の日本について、表面的に見れば専制国であるが、裏面に回って内部を観察してみれば、「権力平均の主義」が広くいきわたった多元的構造を有していたと述べている。すなわち、俗に言う「月に群雲、花に風」のように、チェックとバランスがほどよく浸透

した社会であったというのである。そして、村役人の選出方法や村人の相互扶助・自警組織・勧解など、江戸時代には自治が存在したとも述べている。すなわち、西洋の法制度を継受する場合にも、過度な近代主義や法律万能主義に陥るのではなく、日本的自治の伝統と慣習を尊重しなければならないというのが福沢の理解であった。歴史学の今日的研究成果ないしは地方自治の現代的課題に照らすとき、福沢の江戸時代再評価論には首肯すべき点が多く、その慧眼にはあらためて驚かされるのである。

以上を要約すると、福沢は、(1)まず大陸法系の団体自治の思想を学び(慶応4年～)、(2)つぎに英米法系の住民自治の思想を学び(明治10年～)、(3)最後に日本的自治の思想——歴史主義的発想——を再評価することによって(明治23年～)、日本人の心に訴える独創的地方自治論を結実させた、というのが私の結論である。

福沢の地方自治論が結実してから、すでに120年が過ぎようとしている。しかし、日本社会の中に市民的公共を実現しようとした福沢理論は、理論的にも実践的にもいまだ克服されているとはいいいがたいのである。

(本稿は2005年10月25日に行われた第3回福沢研究センター講演会の概要である。)

韓国近代開化思想に見られる女性観

イ ベ ヨン
李 培 鎔
(梨花女子大学史学科教授)

今日の韓国社会においては、女性の目覚ましい活躍があるが、その源流は、19世紀の女性の意識変化にあると思われる。そこには、韓国開化派の影響があった。特に日本と米国を直に見聞した朴泳孝と兪吉濬は、その代表的事例といえる。

最初の使節団で来日した金綺秀のように儒教思想に



講演中の李培鎔氏

根差す文化的優越意識から脱皮できない例もある中で、朴泳孝と兪吉濬の2人の開化派は、その後の女性の意識変革に影響を与えた。朴泳孝は朝鮮王朝第25代哲宗の婿であり、壬午軍乱後日本に赴き、福沢諭吉と接触、甲申政変に関与して日本亡命後渡米した。再来日して明治学院で学び福沢らと交流する一方、身分制度の打開と男女差別改革を具体化し、高宗に開化に関する上疏を奏上した。その中で女性の服毒による堕胎禁止や早婚禁止を論じている。これについては今まで福沢諭吉の影響が論じられてきたが、福沢は著書の中で必ずしも早婚に害があるとは考えていない。福沢からの影響より、むしろ西洋思想の影響による。夫婦の権利は同じであるとする点や再婚許可などの点は福沢から多くの影響を受けた。彼の改革論では特に開化の要として教育の必要性を挙げており、女性教育は女性の開化を実現させるための方策として提示された。朴泳孝の認識は、法の前には万人すべてが平等であるという平等思想から女性に対する改革論が提議されたものと思われ、女性の開化という近代的課題を遂行するに当たっては女性の再婚許可、早婚禁止などの伝統的な家族制度の改革を優先した。このような朴泳孝の女性観は、それ以降の甲午改革、独立協会、愛国啓蒙運動期に、多くの影響を与え、開化期における女性開化運動での先駆的な役割を果たした。

一方兪吉濬は、韓国ではじめて日本とアメリカに留学した学生である。1881年6月に慶應義塾に入学し、福沢の家に寄宿しながら『西洋事情』『文明論之概略』等を読み、同時に英語と西洋史、地理、政治、経済、法律なども勉強した。帰国後は韓国最初の近代新聞「漢城旬報」の創刊などに尽力した。アメリカではピヴァティ博物館長モースの指導を受けたが、モースにはすでに慶應時代に会っていたようだ。甲申事変の知らせにより急遽帰国したが、以後は幽閉生活となった。その間記された『西遊見聞』では、人材育成のための国民教育の基礎としての女性教育の必要を述べ、身体的に強く学識をそなえる女性のみが、育児の担当者としてその職分を遂行できることを強調した。気質が弱いという指摘は福沢と共通するところだが、福沢の場合は女性の性の問題と関連して論じており、この点が異なる。

以上見たように、朴泳孝の女性観というものは急進的、そしてまた具体的である半面、兪吉濬の場合にはき

わめて慎重で、かつ穏健であった。また両者とも朝鮮後期以来の開化実学の男女平等観を継承し、伝統的な儒教に根を下ろした家族制度と良母賢妻にも根拠を置いており、そこに福沢との違いがある。彼らの思想は後に甲午改革における早婚の禁止や自由意思による再婚許可などを生んだ。

開化派の女性観は、大きな歴史的意味をもっている。第一に女性を性から解放するきっかけをつくった。女性の人権に注目し、結婚の自由、早婚の弊害、再婚禁止、そして妾を置くということの不当を主張し、女性を一個の人格として認識し始めた。第二に女性教育を強調することで、女性を無知の世界から解放し、女性が覚醒する土台を築いた。女性は知識世界に接することで自己開発の意思を確かめる機会が与えられた。第三に内外法の不当さを指摘することによって、女性が限られた空間から解放され、外に出る機会が与えられた。これは徐々に女性の社会参加への機会が開かれる端緒になった。第四に女性に限定された役割だけでなく、多様な社会的力量を発揮できる機会を与え、女性が母や嫁、娘としてのみならず、女性自身として能力を伸ばすことができる意識の基盤づくりとなった。次に五番目として、女性たちを覚醒し、封建的因習から抜け出して近代社会の一員として堂々と立ち上がることができる意識転換を模索する基礎を与えた。こうした彼らの女性開化認識と近代化の努力が、甲午改革期に反映され、それ以降の女性解放運動の基礎的な柱となった。

(本稿は2005年11月26日に行われた福沢研究センター講演会の概要である。)

福沢におけるトクヴィル問題

— 西南戦争と『アメリカのデモクラシー』 —

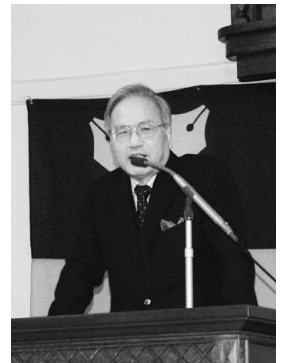
あん ざい とし みつ
安 西 敏 三

(甲南大学法学部教授)

福沢におけるトクヴィル問題とは何か。それは福沢がトクヴィルをどのように読み、如何様に自分のものとして展開しているか、と言う問題である。福沢はトクヴィ

ルの『アメリカのデモクラシー』リーヴ英訳アメリカ版を西南戦争の最中に読んでいるが、その時同時に福沢は中津藩の旧情について考察し、その草稿を残している。また西南戦争の当事者である新政府と新政府を去った維新の立役者、西郷隆盛、西郷に従った薩摩藩士らの行動エートスを調べるべく久保之正の『論語道国章解』その他を読む。この過程でなったのが西郷への追悼文とも言うべき「明治十年丁丑公論」であり、「薩摩の友人某に与る書」である。福沢はしかしながらトクヴィルを自ら読む以前にその『アメリカのデモクラシー』の、興味深い主題について、援用している。それは『分権論』である。そこで福沢は政権・治権分割論を唱え、政治における中央集権と行政における地方分権を主張し、不平士族のエネルギーを後者に振り向けようとしたのである。トクヴィルを通じて大陸に比して文明度が高いと認識されていた英米の先進性をそこに見たのである。ギゾーの文明史が集権化と平等化の同時進行をみているのに比して、旧体制から新体制に移行するにしても、集権化と平等化は矛盾することなく進行するとトクヴィルはアメリカにおいて、そして福沢は我が意を得たとの思いを持ったのである。さらに福沢は愛国心についても小幡訳を通じて新しい知見をもった。それは生まれつきのもので本能的な「天稟の愛国心」であり、近代社会に要求される熟慮された「推考の愛国心」である。福沢は両者を考慮しながら国の問題を自分の問題として把握することが可能な後者に賭ける。この二つのトクヴィル問題については小幡訳に依拠しているのであるが、福沢が直接、トクヴィルのリーヴ英訳本を読んだ成果と言うものが「丁丑公論」と市来吉之助、後の野村政明に宛てた「薩摩の友人某に与る書」である。そうしてその思考経路を示しているのが、第二次大戦後発見公表された「覚書」である。それにはスペンサーなどの読後ノートとともにトクヴィルのそれが約7頁にわたって記されている。中でも注目されるのが久保の薩摩論とトクヴィルのデモクラシー論によって刺激されたノートである。即ち、旧薩摩の政府は専制であるけれども、都鄙の士族が相互に仲間を結ぶのは、島津の命令ではない。それぞれの武士が申し合わせて約束を定めたのである。従って約束違反の場合はそれを認めないか、切腹を申し渡したり、殴ったりするが、当人もそれを甘受している。従って薩摩の社会は藩政は専制であるけれども、藩士相互間では自由自

治の習慣があり、それは恰も自由の精神で専制の君主を奉じているようなものだ。薩摩士族が強いのはこの自ら治め、自ら働くという仲間の申し合わせによるのである。そして、福沢はトクヴィルのデモクラシー論の第一巻328頁にある、カトリックの宗教社会に見られる境遇の平等について論じているところを読んで、そこにおける薩摩藩の身分構造の類似性を確認するノートを記す。専制の下に同権の人民が存在するのである。そこで福沢は薩摩の約束による自治精神が恰も



講演中の安西敏三氏

ニュー・イングランドの建国精神である社会契約に類似し、それにカトリック界における司祭の専制と信者の平等が島津家と郷士も含めての、その他一般武士の関係と同類であることを認識する。同権と民治に赴く契機の強い薩摩を分権のモデルないしは中央の議会制に至る前段階のデモクラシーの礎となると見たのである。それを推進するに相応しい人物こそカリスマ西郷隆盛であったのであり、「丁丑公論」という追悼文においてそれを福沢は期したのである。また野村政明に宛てた書も、薩摩に近代的な立憲政治の可能性の芽があることを訴えたのである。さらに福沢はトクヴィルから陪審制の意義についての知識を得て、西郷が処分される場合に陪審制の適用を建白した。またアメリカにみられる小さな政府についてのトクヴィルの見解は福沢にとって政治的価値を絶対としていた旧武士層の蒙を啓き、そのエネルギーを非政治的分野に向けさせるヒントになっている。さらに西郷に見られる抵抗精神に対する福沢の高い評価は、有司専制ならぬ多数者の専制に対する貴族的精神を描いたトクヴィルに学んでいるともいえる。

(本稿は2005年12月2日に行われた第4回福沢研究センター講演会の概要である。)

官学アカデミズムを作った福沢門下生

—— 初代帝国大学総長渡辺洪基の生涯と思想 ——

たき い かず ひろ
瀧 井 一 博

(兵庫県立大学経営学部助教授)

渡辺洪基(1848—1901)は慶應義塾に学んだ後、外交官、太政官法制局書記官、東京府知事などを務めた後、明治19年3月に帝国大学の創設にあわせてその初代総長となった人物である。「国家の須要に応じる」という国家的使命を負って設立され、明治憲法下の国家エリートの供給源として機能した重要な高等教育機関の経営を初めて任されたにもかかわらず、その知名度は決して高くはない。彼は忘れられた慶應塾生といってよい。そもそも帝大という官学の府の長として君臨し、またそれ以前には自由民権運動の弾圧立法として悪名高い集会条例(明治13年)の起草者でもあった彼は、福沢諭吉の思想とは相容れないかの如くである。彼が慶應塾生として忘れられたのは故なしとしない。

だが、存命中、渡辺は「三十六会長」の異名をとり、国家学会、統計協会、東京地学協会など数々の学会やその他の組織の設立や運営に手腕をふるったことで令名を馳せた。そしてそれら組織化を支えていた理念とは、慶應義塾で彼が福沢から学んだこととも考えられる。

組織化にかかる渡辺の理念とは、知を実学として、すなわち有用なものとして社会の各地各層に行き渡らせるということであり、そのために媒介者となることが彼の自己規定であった。そしてこの媒介とは、単に民間を水平的につなげていくのみならず、官民を連結させることにも向けられていたのである。明治11年に創設した萬年会では当初西洋農学による中央から地方への啓蒙がなされていたが、その後明治13年に開催された萬年会糖蔗集談会では中央の理論家と地方の実業家が集結し、製糖振興のための政策を政府に提言するという下から上へのシンクタンク活動が展開され、その方向はさらに国家学会、統計協会でも受け継がれていく。官学と私学の別を堅持した福沢に対して、渡辺の実学は両者を媒介・連結するものだった。

他方で、渡辺には媒介者としての限界もあった。萬年

◇春の講演会・セミナー

(予告)

テーマ「近代日本の企業家と福沢諭吉」

福沢諭吉の門下あるいは福沢諭吉の思想に共鳴した人々の間からは、多くの経済人が生まれました。平成18年度前期には、上記のような統一テーマを設定し、講演会・セミナーの開催を予定しております。詳しくは福沢研究センターホームページをご覧ください。

なお講演会は広く一般の方々を対象とし、セミナーは大学院生以上の方々による研究会の形式をとっています。

会にせよ国家学会にせよ、学際的に国家のあり方を問うことを目的としていたこれらの組織は、専門分化の趨勢に抗えず、漸次先細りしていく。渡辺は明治初期の文明開化の理念、換言すれば明六社の啓蒙結社の理念をあまりに強く引きずっていたのではないかと考えられる。この点、同じ組織化の天才ではあっても、産業社会の高度化に伴う知の機能変化を鋭敏に見抜き、高等研究体制の再編を強力に押し進めて「ドイツ近代科学を支えた官僚」(潮木守一)と称されるフリードリヒ・アルトホーフとは雲泥の差がある。

もっとも、渡辺の組織化の論理には別様の評価も可能である。かねて筆者は「国制知」という国制分析の視角を提起してきた。これは国家の統治が有効に作用するためには、それを支える知の制度—理論と人の再生産機構—が不可欠との認識から提唱しているものであるが、アルトホーフと渡辺はそれぞれこの「国制知」の重要な側面を体現していると思われる。アルトホーフ体制が「国によって制せられる知」を指し示しているのに対して、官民を縦断する知の制度・あり方を構築しようとした渡辺の思想と活動は「国を制する知」の可能性を暗示しているともいえる。この二つの側面の循環作用を把握することにより、constitutionの動態的な理解を獲得することが期待される。

(本稿は2005年12月10日に行われた第2回福沢研究センターセミナーの概要である。)

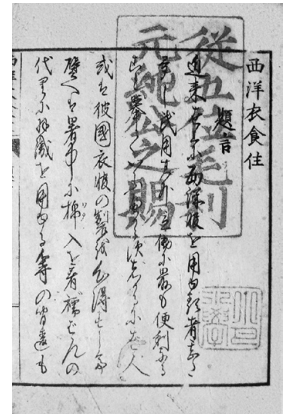
主な新収資料

平成17年9月から12月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

福沢諭吉著作

■ 西洋衣食住

慶応3（1867）年の著作。見返しには「片山氏蔵版」とあり著者は片山淳之助となっているが、「福沢全集緒言」に「当時様々の事情に任せて他名を用ひたる」とあるように実際には福沢諭吉である。西洋人の用いる衣服や食器、調度品などについて、図入りで説明したもの。最後には懐中時計の時の読み方が解説されている。今回収蔵された版本は見返し部分に「従五位毛利元純」の朱印がある。毛利元純は長州藩支藩清末藩の最後の藩主。天保3（1832）年の生まれで、嘉永3（1850）年家督を相続した。文久3（1863）年の長州藩による外国船砲撃に出兵し、8・18政変の際は七卿と共に帰国した。禁門の変によって官位を削られたが、慶応3年復旧。明治8（1875）年44歳で病歿した。

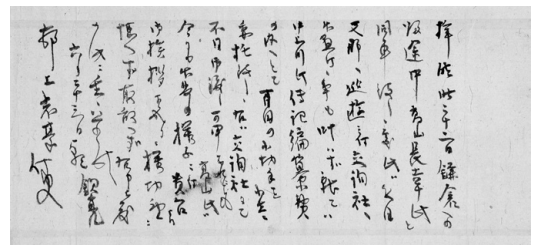
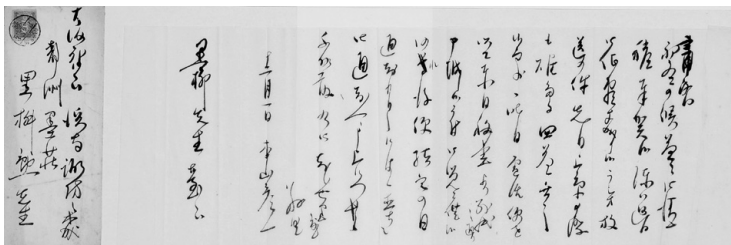


門下生書簡

■ 本山彦一書簡 1通

本山彦一は嘉永6（1853）年熊本藩士の長男に生まれ、藩校時習館に学んだのち、明治4（1871）年に上京し、箕作秋坪の三又学舎に入る。その後福沢諭吉に親炙し、慶應義塾出版社に止宿するようになって、租税寮出仕後も『民間雑誌』などに寄稿した。兵庫県勸業課・学務課長・神戸師範学校長を経て、15年大阪新報社に入り翌年時事新報社に移った。藤田組や山陽鉄道など関西実業界で活躍したが、22年大阪毎日新聞社相談役となり、36年には社長に就任して近代的企業としての新聞社の確立に寄与した。

書簡（写真左）は黒柳勲なる人物に宛てたもので、詳細は不明だが「ラジオ放送の件」に関するもの。



■ 伊藤欽亮書簡 3通

伊藤欽亮は安政4（1857）年萩藩士の次男に生まれ、一時林姓を名乗った。藩校明倫館に学んだのち、攻玉舎に入り、明治10（1877）年6月慶應義塾に入塾した。12年4月に首席で卒業し、静岡新聞・西海日報の社長を務めたのち、17年時事新報の記者となった。20年ごろからは福沢のもとで事実上の編集長として活躍した。実業界にも身を置いたが、陸羯南の『日本』を譲り受け、大正3（1914）年の廃刊まで経営した。

書簡は村上某に宛てたもので、1月31日付のものは島越屋会社入社への祝いを述べたもの。5月15日付は村上子息の結婚式への出席通知、6月23日付は高山長幸より中上川彦次郎伝記編集費への寄付金を預かったことを述べたもの。

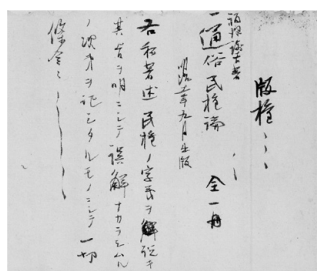
出版関係資料 服部禮次郎氏所蔵資料

連合三田会会長・福沢諭吉協会理事長服部禮次郎氏は、福沢諭吉研究の成果や研究に寄与する多くの資料を福沢研究センターのためにご提供くださっている。今回はそのうち、福沢の出版事業に関わる新資料を紹介する。

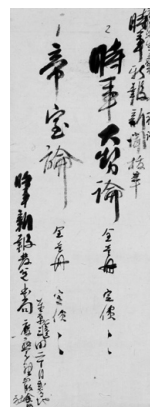
福沢諭吉は出版事業に大きな関心を寄せていたが、最初のベストセラーである『西洋事情』初編・外編を出版したのち、明治2（1869）年11月に「福沢屋諭吉」の名前で書物問屋組合に加入し、出版業の自営に着手した。『福翁自伝』

によれば数寄屋町の鹿島という大きな紙問屋から、即金で土佐半紙を百何十俵も買い入れ、何十人もの版摺の職人を集めて「このくらい紙があれば仕事は永続するに違いない」（『福沢諭吉著作集』第12巻、慶應義塾大学出版会、2003年、P.348）と安心させて、中津出身者2名を監督に事業を開始したという。明治5（1872）年8月ごろ、出版物の売れ行きが非常に増して、慶應義塾出版局に発展することになった。書肆和泉屋の「書物屋仮組連名帳」によれば「一、明治五年八月二日 新加入 三田二丁目十三番地 福沢諭吉」となっていて、このとき福沢屋諭吉の屋号から離れたことがわかる。明治7（1874）年には慶應義塾出版社と改称し、合資組織になって株券を発行した。

■ 出版許可に関する書類



明治になると「出版条例」が定められ、出版許可の申請や納本などが義務付けられた。明治2（1869）年5月の行政官達が最初で、5年1月文部省布達改正「出版条例」、8年9月太政官布告改正「出版条例」と続き、内務省の担当となって20年にも改正された。26年にはあとをうけて出版法が制定されている。左掲の資料は、『通俗民権論』（11年9月）出版の際に福沢が書いた申請書の下書きと思われる。他に『分権論』（明治10年11月）、『通俗国権論』（11年9月）のものが残っている。



■ 出版広告下書き

右に掲げた資料は、慶應義塾出版社が作成した広告の下書き。福沢諭吉自筆である。形状から考えて、おそらく書店に貼り出すためのものであろう。

❖ 第171回福沢先生誕生記念会展示

毎年1月10日に行われる福沢先生誕生記念会および新年名刺交換会において、福沢研究センターは福沢諭吉および慶應義塾関係の資料展示を行っている。展示は2部構成で、その年の記念講演の内容に関連した資料とその年度に福沢研究センターが新たに収蔵した資料を展示している。

そもそも福沢の誕生を1月10日に祝うようになったのは、明治44（1911）年からである。歿後10年を経たこの年、福沢家では福沢の誕生日である天保5年の12月12日は西暦に換算すると1835年の1月10日にあたることから、以後1月10日に誕生を祝うことにした。各地三田会もこれに倣うことになり、それまでは2月3日の命日に記念会を催してきたが、以後次々と1月10日に記念会が催されるようになっていった。慶應義塾でも大正3（1914）年以降、福沢先生記念日をそれまでの2月3日から1月10日に変更し、当日は休業と定めた。記念会での資料展示は、福沢研究センターの前身塾史資料室が始めて、現在に至っている。

本年は 白石孝名誉教授の講演「福沢先生と日本橋織物問屋」にちなみ、日本橋の織物問屋のひとつマル文の堀越角次郎と福沢諭吉に関わる史料を展示した。初代堀越角次郎は上州群馬郡藤塚村の出身で、同郷のマル文堀越文右衛門の援助で日本橋伊勢町に反物店を開いた。洋学者たちの資金を預かり利殖をはかることも行っており、福沢も預けたらしい。2代目角次郎は堀越文右衛門の次男で福沢とは若い時分から面識があり、慶應義塾を援助した。3代目角次郎は二代目の長男で、明治19年幼稚舎に入学している。初代堀越角次郎の逝去を報じた明治18年8月29日付福沢一郎・捨次郎宛福沢諭吉書簡、2代目堀越角次郎夫妻と娘を招待する席に、小泉夫妻と娘を招待した20年と推定される12月6日付書簡、3代目堀越角次郎が病氣療養中の家事・商事や財産について、実母を助けてくれるよう福沢に依頼した29年8月19日付福沢諭吉宛堀越角次郎願状などの資料を展示した。



❖ 主な動き

■ 講演会・セミナー

本年度秋学期には、本誌に要約を掲載したように（4～7頁）、「明治期法制と福沢諭吉」という統一テーマで、講演会2回とセミナー1回が行われ、また、昨年度秋学期に行われた「北東アジアの伝統と福沢諭吉」のシリーズを継承して、韓国梨花女子大学の李培鎔教授をお招きし講演会を開催した。なお、「北東アジアの伝統と福沢諭吉」のシリーズは今後も引き続き、適宜、開催する方針である。

■ 『近代日本研究』第22巻刊行

年度末に『近代日本研究』第22巻を発行。本巻は「特集・交詢社創立百二十五年」5本、投稿論説2本、講演録2本、資料紹介1本等を収録。なお第23巻は、大学史・大学アーカイヴズ特集を組む予定。また同巻については、自由論題の投稿希望を現在受付けている（執筆申込書の締切り、5月末日）。

■ 大学史関係諸学会の開催に協力

10月には、全国大学史資料協議会2005年度総会・全国研究会が慶應義塾三田キャンパスを会場として行われ、福沢研究センターの市古健次、三瓶美和子が、開催校としての会務全般を担当した。また12月には大学史研究会第28回研究セミナーが、米山光儀所員らの協力により、同じく三田キャンパスを会場に開催された。

■ 『慶應義塾150年史資料集』、創立150年記念事業に

既にお知らせしたように、福沢研究センターは、平成16年2月10日に、慶應義塾創立150年記念事業検討ワーキング・グループを発足させ、同グループの検討を基礎に、同年6月23日の平成16年度第1回福沢研究センター運営委員会にて、『慶應義塾150年史資料集』全20巻（別巻として『慶應義塾史事典』『福澤諭吉事典』を含む）を2008年より20年をかけて刊行することを同センターの事業として決定した。この決定に基づき、同16年12月11日に『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会を設置し、以後12回の委員会を重ねている。

このような、『慶應義塾150年史資料集』計画に対して、慶應義塾創立150年記念事業委員会は、平成17年9月に、この企画を、創立150年記念事業とする方向性を提示し、さらに同記念事業委員会の部局である創立150年記念誌刊行委員会を本年2月15日に開催し、事業委員会の正式事業として決定した。なおこの決定に際して、従来『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会の下で行われていた『慶應義塾史事典』の編集を、独立の『慶應義塾史事典』編纂委員会において行うこととなった。

■ 『慶應義塾史事典』の採録項目の検討進む

本『事典』編纂委員会は、諸種の資料・文献をもとに、事項項目767項目、人名項目350項目の採録候補を挙げ、現在、全巻で800項目程度に取捨選択する作業を進めている。また、全巻の章別構成もほぼ決定し、今春、各項目の執筆を依頼できる予定。

■ 清岡暎一家資料の整理終わる

昨年3月に福沢諭吉の孫で慶應義塾大学名誉教授であった故清岡暎一氏の遺品が、義塾へ寄贈された。その総量は段ボール箱にして計60箱にのぼる多量であり、しかも保存状態が悪い物や、ファイリングが行われていない紙片状のものも多かった。福沢研究センターは、本年度、この資料の整理を行ってきたが、この度、収蔵保管できる状態への整理を終了した。

■ DMC 協力の慶應義塾関係写真データ・ベース完成

平成16年度より、福沢研究センターは、デジタル・メディア・コンテンツ統合研究機構（DMC）の福沢諭吉・慶應義塾関係プロジェクトに協力してきた。これは、約1,000件の福沢諭吉・慶應義塾関係写真とそのメタ・データを作成し、インターネットで流すプロジェクトであるが、写真に関しては一般公開の為に多くの解決すべき問題があり、当初の予想を超える多大な時間が必要となった。しかし、その作業も今年度末をもって完成し、DMCにデータを納品できる予定である。

■ 小幡篤次郎没後百年記念行事に協力

平成17年は、福沢の女房役として草創期慶應義塾を支えた小幡篤次郎没後百年に当たる。この年を記念して11月に中津市・福沢記念館・中津市立小幡記念図書館が、小幡篤次郎没後百年展を開催した。福沢研究センターは、本展覧会に際して、展示企画や資料提供に関して協力。また同時期に中津市で開催された小幡篤次郎没後百年記念講演会の講師として、所員西沢直子助教授を派遣した。

■ 遡及入力のための図書検索システム

福沢研究センターは、蔵書の迅速な遡及入力のためのシステムを研究してきており、昨年夏には新規収蔵分に関するシステムを稼働させた。それに加えて、この度、遡及入力のためのシステムも作成。4月以降、本格的遡及入力を開始する。

■ 訂正

前号2頁左側最下段の「松井」は「桜井」の誤まりでした。お詫びして訂正致します。

■ 諸会議

* 第2回運営委員会（11月4日：東館4階小会議室）

1. 報告事項
 - (1)人事、(2)「慶應義塾150年史資料集」編纂状況、
 - (3)「慶應義塾史事典」編集顧問の選任
2. 協議事項
 - (1)福沢研究センター設置講座：新規開講科目
 - (2)福沢研究センター訪問教授の職位附与
3. その他懇談事項ほか

* 第2回センター会議（1月20日：東館4階セミナー室）

1. 人事について
2. 平成18年度予算について
3. 収蔵図書の整理等について
4. 『近代日本研究』編集状況について
5. 『慶應義塾150年史資料集』編纂状況

* 「慶應義塾150年史資料集」編纂委員会

第8回（9月9日：図書館旧館展示室）

第9回（10月20日：図書館旧館小会議室）

第10回（12月1日：図書館旧館小会議室）

第11回（1月26日：図書館旧館小会議室）

第12回（3月3日：図書館旧館小会議室）

* ワークショップ

第4回（11月11日：東館8階小会議室）

「韓国の家族制度と家族法—韓国女性の社会的地位の変遷をめぐって」 報告者 李東律

第5回（11月25日：図書館旧館小会議室）

「近代日韓の比較『家庭』論—両国の『家庭雑誌』を中心に」 報告者 金眞琬

■ 人事異動

<国際センター運営委員会委員>

新任 西沢直子 10月1日付

<研究嘱託>

新任 岡部泰子 2月1日付

<訪問教授>

リッキ・カーステン（レイデン大学）12月10日～31日

<事務局>

退職 赤尾迪子（課長代理） 9月30日付

小川悦子（嘱託） 10月31日付

新任 佐藤利加（派遣） 10月20日付

矢島由実子（嘱託） 11月1日付

■ 展示会開催

* 第171回福沢先生誕生記念会展示

（1月10日：西校舎ホールロビー）

■ 資料貸出・協力

* 慶應連合三田会主催「福沢諭吉 適塾入塾150年」展
（10月16日：来往舎 日吉）

* 福沢記念館・中津市立小幡記念図書館、中津市主催・
慶應義塾協賛「小幡篤次郎没後百年」展
（11月14～22日：中津市立小幡記念図書館）

■ 来往

* ソウル産業大学校徐毅植教授（10月）

* 東洋大学井上円了記念学術センター穂山幹夫所長
（11月9日）

* 小幡記念図書館国分重喜館長（11月28～29日）

* 筑波大学国分典子教授、韓国東亜大学校金考全教授
（12月17日）

* デリー大学タンカ教授（1月9日）

* 共同通信社記者東海亮樹氏（1月16日）

* 韓国京畿文化財団専門委員崔姓娘氏他一行（1月20日）

■ 出張・見学

* 西沢直子助教授 「小幡篤次郎没後百年」展の展示準備、講演のため出張（10月21日、11月12～13日、19～21日：福沢記念館、中津市立小幡記念図書館）

* 寺崎修副所長 高校生弁論大会審査委員長として出張
（11月16～17日：中津）

* 久納孝彦教授 福沢先生106回忌法要に伴う講演
「福沢先生の実証精神と慶應義塾における実学教育」
（2月3日：中津市 リル・ドリーム）

■ 講師派遣

* 全国大学史資料協議会2005年度総会において小室正紀所長（「近代日本研究と福沢研究センター」、西沢直子助教授（「『150年史資料集』編纂作業と資料整理」）、記念講演（10月5日：東館8階ホール）

* 西沢直子助教授 デジタルアーカイブ研究会（共同研究：メディアセンター、アートセンター、HUMI プロジェクト、福沢研究センター）、資料整理について講演（10月14日：図書館5階会議室）

* 西沢直子助教授 小幡篤次郎没後百年記念講演会にて「中津が生んだ近代の先駆者 小幡篤次郎兄弟と福沢諭吉」（11月20日：グランプラザ中津ホテル）

* 小室正紀所長 大学史研究会第28回研究セミナー課題研究「自校の大学史をつくり、つたえる」にて「慶應義塾における近代日本研究と大学史講義」
（12月17日：南館）

スタッフ一覧

所 長	小室 正紀	経済学部教授
副 所 長	寺崎 修	法学部教授
	岩谷 十郎	同
運営委員	池田 幸弘	経済学部教授
	梅垣 理郎	総合政策学部教授
	小野 修三	商学部教授
	久納 孝彦	理工学部教授
	竹内 勤	医学部教授
	樽井 正義	文学部教授
	林 温	同
	米山 光儀	教職課程センター教授
所 員	有末 賢	法学部教授
	岩崎 弘	幼稚舎教諭
	牛島 利明	商学部助教授
	大久保忠宗	普通部教諭
	太田 昭子	法学部教授
	大塚 彰	志木高等学校教諭
	加藤 三明	幼稚舎教諭
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭
	西澤 直子	福沢研究センター助教授
	平野 隆	商学部教授
	藤田 弘夫	文学部教授
	山内 慶太	看護医療学部教授
顧 問	飯田 鼎	名誉教授
	石坂 巖	同
	内山 秀夫	同
	河北 展生	同
	桑原 三郎	元幼稚舎教諭
	小泉 仰	名誉教授
	佐志 傳	元高等学校教諭
	坂井 達朗	名誉教授
	中村 勝己	同
	西川 俊作	同
	松崎 欣一	名誉教諭

客員所員	飯田 泰三	法政大学教授
	井田 進也	大妻女子大学教授
	區 建英	新潟国際情報大学教授
	掛川トミ子	関西大学名誉教授
	片岡 豊	白鷗大学教授
	我部 政男	山梨学院大学教授
	川崎 勝	南山大学教授
	佐藤 正幸	山梨大学教授
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
	曾野 洋	玉川大学助教授
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	長 幸男	東京外国語大学名誉教授
	西田 毅	同志社大学教授
	浜野 潔	関西大学教授
	平山 洋	静岡県立大学助手
	藤原 亮一	苫小牧駒澤大学教授
	堀 幸雄	
	前坊 洋	東北公益文科大学助教授
	松沢 弘陽	
	松田宏一郎	立教大学教授
	宮村 治雄	成蹊大学教授
	森川 英正	
	山田 央子	青山学院大学助教授
	林 宗元	韓国関東大学校教授
	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授

研究嘱託	山根 秋乃	
	岡部 泰子	ニューヨーク学院教諭
	金 真琬	淑明女子大学講師
	巫 碧秀	

事 務 局	市古 健次	事務長
	三瓶美和子	係主任
	勝又由紀子	嘱 託
	矢島由実子	同
	佐藤 利加	派遣スタッフ
	柄越 祥子	非常勤嘱託
	吉岡 拓	同

慶應義塾福沢研究センター通信 第4号

News letter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2006年3月31日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所